

富雄丸山古墳の発掘調査

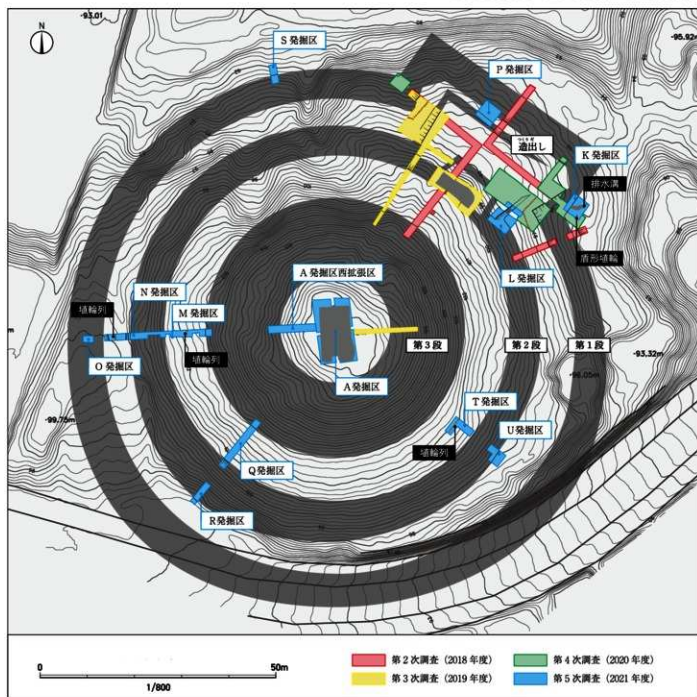
—第5次調査—

奈良市教育委員会





富雄丸山古墳の位置 (下図は地理院地図)



発掘区位置図



2段目平坦面の鎌付円筒埴輪列：北東から (T発掘区)



造出し中段と円丘部の接続部分：北東から (L発掘区)



造出し南東側の墓石・排水溝・層形埴輪：南東から (K発掘区)

はじめに

富雄丸山古墳は、1972年に奈良県教育委員会が発掘調査を実施し、墳頂部に粘土椀（埋葬施設）のある大型円墳であることが判明しました。明治時代に盗掘された副葬品は、現在京都国立博物館に所蔵され重要文化財に指定されています。奈良市教育委員会では2017年度に航空レーザ測量（第1次調査）、2018年度に発掘調査（第2次調査）を行い、直径109mの造出し付円墳（日本最大の円墳）であることがわかりました。

第3・4次調査（2019・2020年度）では、造出しが上・中・下段に構築されていること等が判明しました。

発掘調査成果

造出しの調査

K発掘区 南東側裾部の状態を確認するために設定しました。その結果、第4次調査出土の盾形埴輪は単独で樹立していたことがわかりました。また、葺石の検出状態から下段は平坦面が前面に向かって下降し上端がハの字に開き、裾部は主軸に平行することがわかりました。他に、葺石の下から続く排水溝を検出しました。幅約0.7m、深さ約0.3m以上で溝内には葺石と同様の石材が詰まっています。途中で屈曲し、地形の低い北東側へ続きます。

L発掘区 南東側の中段と円丘部の接続部に設定しました。その結果、円丘部の2段目斜面に造出し中段が接続することを確認しました。接続部分で中段斜面の高さは約0.5mありますが、前面に向かって低くなります。

P発掘区 北東側下段平坦面の埴輪列の有無を確認するために設定しましたが、樹立した状態の埴輪や掘方等も見つかりませんでした。造出し側面の埴輪列が前面まで続かず途切れることを南東側で確認しているため、前面にはめぐっていなかった可能性が高くなりました。

円丘部の調査

A発掘区西拡張区 墳頂部に未知の遺構があるかを確認するために設定しましたが、遺構はありませんでした。

M・N・O発掘区 墳丘西側の段築等を確認するために設定しました。その結果、2段目平坦面（幅約9m）とその中央に並ぶ埴輪列、残存状態の良い2段目斜面の葺石を検出し、1段目平坦面（幅約4.5m）では2段目斜面の基底石から約3mの位置で埴輪列を確認しました。1段目埴輪列が密接に並ぶのに対し、2段目埴輪列は約0.2mの間隔を空けて並べられ、贖付円筒埴輪の破片が多く出土することから、1段目は普通円筒埴輪、2段目は贖付円筒埴輪が並べられたようです。

Q・R発掘区 造出しとは反対側にあたる部分に発掘区を設定しました。その結果、2段目斜面の裾を想定より外側で確認し、造出し側よりも斜面幅が広がることがわかりました。

S発掘区 北西側の墳丘裾を確認するために設定し、ほぼ想定位置で裾部を確認しました。

T・U発掘区 2段目の状態を確認するために設定し、平坦面で贖付円筒埴輪が樹立した状態の埴輪列を確認しました。よって、富雄丸山古墳では墳頂部・2段目に贖付円筒埴輪、原則1段目を普通円筒埴輪と置き分けていることがわかりました。また2段目斜面の葺石とその裾も確認しました。

発掘調査体験×学生との協働調査

富雄丸山古墳の調査では、文化財活用事業として発掘調査体験を実施しています。約300名の参加者が墳頂部の再発掘に参加し、発掘調査の意義や文化財の大切さを学んでいただきました。

また、奈良大学との包括連携協定に基づく文化財学科の学生、東京・筑波・法政・大阪大学で古墳研究を行う大学院生と協働して発掘調査を実施しました。



富雄丸山古墳の発掘調査

—第5次調査—

編集：奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター 発行：奈良市教育委員会
〒630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地 発行日：2022年2月4日
TEL 0742-33-1821

表紙写真：墳丘西側 全景；西から（M・N発掘区）

